

令和2年9月 4日

南の風 361

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

トランジションディフェンスという、思い出すことが一つあります。

2016年リオ五輪の決勝トーナメント、女子ベスト8のオーストラリア戦です。この試合、日本女子代表はリードして4Qを迎えます。

相手のセンター（203cm）が、トランジション時にリムランナーとして走ります。日本のディフェンダーがハリーバックして戻ります。ボールがフロントに運ばれ、相手センターがペイントのトップ辺りでポストアップします。そしてボールがポストに入り、シュートが決まります。このプレーを立て続けにやられたことがきっかけとなり（私は今でもそう思っています）、逆転されてしまいます。

ベスト4に手が掛かっていた試合だけに、たいへん悔しい結果となりました。

逆転の直接原因となってしまったトランジションディフェンスですが、リオ五輪特集号Ⅱでも触れたのですが、私はリムランナーに対する『戻りながらの守り』が大事だと思います。映像を観ると分かるのですが、相手センターに対してディフェンダーは近くを並走しているだけのように見えます。相手センターはストレスを感じることなくフロントに入り、フリースローラインのやや高い位置でポジション取りをし、ターンシュートします。これがしっかり決まります。このプレーを1回やられてしまうのは仕方ないとしても、繰り返してやられてしまったのがもったいなかったです。

ベスト4に手が掛かりかけた、あのオーストラリア戦は、返す返すも残念でした。

私見ですが、トランジション時にサイズのある相手の4番、5番の選手が走ってきた場合は、フロントコートに入る前から自由にさせないようにタイトにつくべきです。早めに走るコースを潰したり、進行を妨げたりすることが大事です。何とかストレスを与えて時間をかけさせるようにします。そうすることによって、フロントでよいポジションを取らせないようにし、万一ポストアップされたとしても、ストレスを与えることによってプレーを制限させることができると思うのです。ただ並走していたのでは、サイズのある選手は気持ちよくポストアップしてしまいます。

また当然リムランナーに対する守りだけでなく、サイドを走るウイングのランナーやボールマンに対するピックアップも必要です。下がりながら自分のディフェンスを探すのではなく、コミュニケーションを取りながら、ボールマンをチェックしウイングランナーをケアすることを忘れてはなりません。

付け足しです。360号にも書きましたが、ミニバスや中学の練習やゲームを見ていると、ハリーバックすることが目的になっていることが多いです。意図をもって素早く戻っている選手は少ないように感じます。ハリーバックして態勢を作ってから守ろうとしたのでは遅いのです。戻りながら危険な相手を行きたいところに行かせないようにすることや、やられてはいけないプレーをコミュニケーションしながら未然に防ぐことが重要になります。

日頃のトランジションの練習の中に、ディフェンスのチーム練習（チームとしてのトランジションの守り方）も組み込むことをお奨めします。シチュエーション練習として取り上げることで、選手が自分で考えながら取り組めるようにすることが大切です。